OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語の「シオワル」と中国語の「完」について
Author(s)	張, 麗華
Citation	語文. 1985, 46, p. 22-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68737
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語の「シオワル」と中国語の「完」について

張　麗華

一、はじめに

日本語には「シオワル」[注1]という動作・作用の終了[注2]を表す複合動詞があるが、中国語にも形式も意味もそれに似た「完 wan」の表現がある。日本語の「シオワル」は、『日本語教育事典』では、終結相[注3]というアスペクトを表すものとされているのに対して、中国語の「完」は、動作・作用の終結を表すと説明する学者[注4]が見られる。両者がこのようによく似ている一面があるため、中国の日本語学習者は、「シオワル」は「完」に相当する表現だと理解してしまい、また逆に、日本の中国語学習者は、「完」は「シオワル」に当る表現だと考えてしまう傾向があるように思われる。はたして両者は同じであろうか。本稿は一つの試みとして、両表現形式の特徴について考察をしてみることにする。

なお、研究資料として、主に日中両語の小説及びその訳を利用するが、適当な用例がない場合は自分で作例する。また用例を引用する時は略号（作品名の最初の二字）を用いることにする。

二、「シオワル」について

二―一、従来の研究

「シオワル」の意味や用法だけについて論じた論文はいままでないが、それに触れたところのある文献としては、つぎの三つが挙げられる。

(1) 国広哲弥編『ことばの意味3』[注5]（1982）

この本には、類義語の研究として、複合動詞「アゲル・キル・オエル・オワル」の項目があがっている（78～86ページ）。「オエル」と「オワル」については、「動作の終了」を表すと説明し、さらにその特徴として、「予定の行為」の終了を表す、と指摘し、「したがって自然現象の〈終了〉については用いられない」[注6]と解釈している。

(2) 日本語教育学会編『日本語教育事典』（1982）

前記の本とほとんど同じ記述をしているが、最初の説明を引用しておくと、つぎの通りである。

「継続動詞に付いて、終了の意を表すが、その終了は予想されているという感じを伴う。人の関与し得ないような自然発生

的現象には用いられない。」（372ページ）

(3) 森山卓郎「動詞のアスペクチュアルな素性について」[注7]（1983）

氏はこの論文で、動詞のアスペクチュアルな素性の一つとして、「終結性」という概念を提出している。そして、その表現形式として「オワル」を挙げ、終結性という観点から述べているが、氏は、動詞を、最初から動きの全体量が決まっているかどうかによって、終結動詞と非終結動詞とに分け、そして、非終結動詞でも、全体量が規定された条件の下で「シオワル」などと承接する、と論じている。

以上挙げた三つの文献では、(1)と(2)は、「シオワル」そのものの意味と用法を解釈するものであるのに対して、(3)は、終結を表すアスペクト形式の一つとしての「シオワル」を用いて、動詞のアスペクチュアルな素性を明らかにしようとするものである。

このように、従来の研究によって、「シオワル」は継続動詞につき、予定の行為の終了を表し、しかも、その行為は動きの全体量限定ができるものだ、ということが明らかになった。が、実際「シオワル」は、継続動詞だけでなく、「全員乗りオワル」のような表現が成立するように、瞬間的な動作を表す動詞の後につくことも可能であり、また「笑いオワル」のように動きの量が限定できず、予定の行為ともいいきれない動詞の後に結びついて用いられることもあるのである。

そこで、筆者は従来の研究をふまえた上で、「シオワル」の特徴について、以下二つの仮説を立てて考察を進めたいと思う。

(1) 「シオワル」は動きの表現として、動作・作用の終了を表すのではなかろうか。

(2) 「シオワル」の表す終了には、動きの量がなくなることによる動作・作用の終了と動作主の意志による動作・作用の終了、という二種類のものがあるのではなかろうか。

二―二、動詞の動作性と「シオワル」との関係

動作・作用を表す動詞の中には「シオワル」と結びつくものとそうでないものとがあるが、それはまずその動詞で表される動作・作用が動作性を伴うかどうかと関係があるように思われる。ここで言う動作性を伴うとは、状態的な表現ではなく、動作・作用を動きととらえる表現のことである。継続動詞も瞬間動詞も同じことが言える。まずつぎの表を見てみよう。

〈表1〉 動詞の動作性と「シオワル」との関係

	「シオワル」と結びつくもの	「シオワル」と結びつかないもの
継続動詞	書く→書きオワル 読む→読みオワル	過ごす→※過ごしオワル 飼う→※飼いオワル
瞬間動詞	乗る→(全員)乗りオワル 下校する→(全員)下校しオワル	行く→※行きオワル 来る→※来オワル

注 ※は不適当であることを表す。以下同じ。

表の中に出てくる動詞は、いずれも人間の動作・作用を表すにもかかわらず、「シオワル」と結びつくものとそうでないものとに分かれるが、それは動作性を伴うものなのかどうかの違いによると思われる。例えば、継続動詞の「書く」と「過ごす」とでは、「原稿を書きオワル」のように「書きオワル」という表現ができるのに対して、「夏休みを過ごしオワル」とは言わず、つまり「過ごしオワ

ル」という表現はできないが、それは、「書く」という動詞で表されるのが動きを含んだ動作であるのに対して、「過ごす」で表されるのは一種の状態だからである。動きをとらえることができないため、「シオワル」と結びつかないこの類の継続動詞として、ほかに「飼う」、「暮す」、「住む」などのものが挙げられる。

瞬間動詞の場合も同じである。例えば「乗る」、「下校する」のような動詞は「全員乗りオワル」、「全員下校しオワル」のように用いることができるが、それは「乗る」、「下校する」というような動詞で表されるのが動きととらえられる動作だからである。もし「乗る」、「下校する」のかわりに「行く」、「来る」のような動作性の弱い動詞にすると、「全員行きオワル」、「全員来オワル」のようには言えなくなるであろう。ただ瞬間的な動きを表す動詞の場合、普通動きの全体量限定が必要だが、それについてはつぎの段で述べることにする。

二―三、動きの量限定と「シオワル」との関係

森山氏は前記論文で動詞の終結性を論じる時、終結性と動きの量限定との関係について、つぎのように述べている。

「終結性があるためには終結点がなければならないわけであるが、このことは、言葉を換えていえば、動きの全体量が決まっているということである。」(12ページ)

筆者は、基本的にはこの説に賛成するが、しかし、「笑いオワル」のような、動きの全体量が定まらない表現でも「シオワル」が用いられることがあることを考えると、動詞の性質と量限定との関係についてさらに検討する余地があるように思われる。それについては、筆者はつぎのように考える。

(1) 無意志動詞と瞬間的な動きを表す意志動詞は、「シオワル」と結びついて用いられる時、動きの全体量限定が前提になっている。

(2) 継続的な動きを表す意志動詞は、「シオワル」と結びついて用いられる時、動きの量が限定されている場合とそうでない場合とがある。

まず(1)の用法について、用例を見ながら考えてみる。

① 薬が溶け終わったら、別の液を加えよう。(『日本語教育事典』372ページ)

② ベルが鳴り終わってから、部屋を出た。(同右)

①の文の中に「溶けオワル」という表現が出ているが、「溶ける」という動詞に「シオワル」がついて「溶けオワル」が用いられているのは、「溶ける」という動きの量が限定の「薬」によって初めから決まっているためである。また②の文の中には「鳴りオワル」という表現が用いられているが、「ベルが鳴りオワル」が言えるのは、普通ベルの鳴る時間が限定されており、「鳴る」という動きの量がそれによって決まっているからである。自然現象を表す無意志動詞の中で、「降る」、「吹く」、「揺れる」、「動く」などのものはいずれも「シオワル」と結びつきにくいが、その理由はそれらの動詞で表される動きの量というものが限定しにくいことにあるのではないかと考えられる。

つぎに瞬間的な動きを表す意志動詞について考えてみたいと思う。

③ 乗客が全員乗りオエル(オワル)とバスはすぐ発車した。(『ことばの意味3』85ページ)

「全員乗りオエル（オワル）」の中の動詞、「乗る」は意志動詞だが、瞬間的な動きを表すもので、この文脈において「シオワル」と結びついて用いられているのは、全員乗るという限定されている繰り返しの動作を表すからである。もしそれをつぎのように言い換えれば、「乗りオエル（オワル）」は使えなくなるであろう。

a？太郎が乗りオエル（オワル）とバスはすぐ発車した。

b？何人かが乗りオエル（オワル）とバスはすぐ発車した。

aの文が不自然なのは、主語が単数の人間であるため、「乗る」で表されるのが瞬間的な動作になり、動きの量というものがとらえられないからである。またbの文が言えないのは、それで表されているのは繰り返しの動作だが、その全体量が限定されていないためである。このように、瞬間的な動きを表す動詞が「シオワル」と結びついて用いられる時は、動きの全体量限定が前提になっていなければならない。

以上、無意志動詞と瞬間的な動きを表す意志動詞が「シオワル」と結びつく場合、動きの全体量限定を前提とすることについて述べてきたが、それは、両者で表される動きの量がいずれも動作主の意志と直接かかわらないからである。無意志動詞はもとより、瞬間的な動きを表す意志動詞も後に「シオワル」をつけて用いる時、複数の人間によって動きの全体量が限定されるため、一人一人の動作主の意志とは直接関係がない。両者で表される動きの終了はすなわち動きの量がなくなることであるため、両者が「シオワル」と結びつく時は、動きの全体量限定が必要になる、と考えられよう。

つぎに継続的な動作を表す意志動詞が「シオワル」と結びついて用いられる時、動きの量限定との関係について考えてみることにするが、この類の動詞は、動きの量が限定されている動作・作用の終了を表すものと、動作主の意志によって必要な程度まで行なわれたと思う動作・作用を終えることを表すものとに分けることができると思う。

まず前者の意味で用いられる用例を見てみよう。

④ その瞬間、生徒たちは全身に火傷をしたが、引率教官は生徒一同に「海ゆかば……」の歌をピアニシモで合唱させ、歌い終ったところで「解散」を命じ、教官は卒先して折から満潮の川に身を投げた。（黒い・5）

⑤ 鏡史郎は大勢の人の間にはさまって、横断歩道を横切った。途中から周囲の人の動きが早くなったので、鏡史郎も半ば駆けるようにした。が、道を渡り終えたところで、（夜の・42）

⑥ 書類を書き終って読み返していると、工場の機械の音がぴたりと止まった。（黒い・304）

この三つの文脈における動詞、「歌う」、「渡る」、「書く」で表される動きの量は、それぞれ「歌」、「道」、「書類」の量によって限定されており、「歌いオワル」、「渡りオエル」、「書きオワル」で表されているのは、その限定されている動きの量がなくなることである。継続的な動きを表す意志動詞で、「シオワル」と結びつく時、この意味で用いられるものは非常に多い。例えば、「論文を読みオワル」、「宿題をやりオワル」、「映画を見オワル」などの表現の中の「読みオワル」、「やりオワル」、「見オワル」はみなこの類に入る。

一方、動きの量限定ができない動詞で、「シオワル」と結びついて用いられるものもある。例えば、

⑦ 拝み終ってからのオオヨン婆は……。（海暗・299）

⑧ 突然妙子は腹を押えて笑い出した。妙子が笑い終るまで、植はじっと待っていた。（背徳・148）

「拝む」、「笑う」のような動詞は、初めから動きの全体量が決まっているわけではない。もし前者の「シオワル」の意味を「終わりまで～する」、「全部～する」と解釈することができるとすれば、後者の「シオワル」はこの解釈では説明できない。そのかわりに「～しているのを終わる」とでも解釈できよう。つまりここの「シオワル」で表されているのは、動きの量がなくなることではなく、動作主の意志によって、必要な程度まで行なったと思う動作・作用を終えることである。大阪大学（豊中キャンパス）図書館の二階の閲覧室の書架にところどころ

「読み終った図書は必らず返却」

と書いてあるが、この場合の「読みオワル」で表されているのもその意味であろう。

以上述べてきた「シオワル」の意味と動詞の性質との関係をまとめると、つぎのようになる。

〈表2〉「シオワル」の意味と動詞の性質との関係

「シオワル」の意味	動詞の性質		語例
動きの量がなくなることによる動作・作用の終了を表す	意動志詞	継続動詞	（論文を）書きオワル
		瞬間動詞	（全員）乗りオワル
	無意志動詞	継続動詞	（薬が）溶けオワル
		瞬間動詞	※落ちオワル
動作主の意志による動作・作用の終了を表す	意志動詞	継続動詞	笑いオワル
		瞬間動詞	※買いオワル

三、「完」について

三―一、従来の研究

中国語の「完」はいままでほとんど研究されていないと言ってよい。中国語の文法書や教科書では、それを動作・作用の結果を表すものとし[注8]、あまり問題にしなかったが、木村英樹氏[注9]（1982）はそれをアスペクト形式――「了 le」〈～た〉、「着 zhe」〈～している〉、「起来 qilai」〈～始める〉、「下去 xiaqu」〈～続ける〉、「完 wan」〈～終わる〉、「過 guo」〈～たことがある〉――の一つとして考えている[注10]。氏は「完」などをアスペクトを表すものと主張し、従来結果補語と言われているものを新しい観点からとらえているのである。

「完」については、氏は、

「始動の『起来』と継続の『下去』と終結の『完』」

というふうに並べて論じているように、動作・作用の終結を表すものととらえているが、その論文で「完」についての詳しい議論はしていない。中国語の「完」は日本語の「シオワル」と同じ性質のものだろうか、筆者はここで「シオワル」と対照しながら、「完」の性質を明らかにしようとする[注11]。

三―二、「完」の意味と用法

「シオワル」と同じように、「完」もつく動詞には制限があるが、基本的には「シオワル」に似ているので、ここでは紙数の関係でそれに触れないことにする。以下「完」の意味と用法を中心に述べていきたいが、それについては、筆者は大きく三つに分けて考えられるのではないかと思う。

(1) 動作・作用の終了を表す。

この意味で用いられる場合は「シオワル」に相当し、二種類のものが見られる。

a 動きの全体量が定まっている場合、動きの量がなくなることによって、動作・作用が終了することを表す。例えば、

⑨ 読完了、成崗伸了伸腰、站起来、倒杯開水喝了。(紅岩・87)

訳、読み終わってひとつ伸びをすると、立ち上がって湯を飲んだ。(71)

⑩ 数完、放在了閣葫芦罐儿里。(駱駝・82)

訳、数えおわって貯金玉に入れた。(142)

b 動作主の意志によって持続している動作・作用を終えることを表す。例えば、

⑪ 哭完、她抹着泪対祥子説、(駱駝・153)

訳、泣きおわって、涙を拭きながら言った。(270)

「哭完」の中の「完」は、用例⑨⑩の中の「読完」、「数完」の「完」と異なり、「終わりまで～する」、「全部～する」というような意味を表すのではなく、「～しているのを終わる」意を表しているのである。

(2) 動作・作用の完了を表す。

まずつぎの用例を見てみよう。

⑫ 「……!還不快洗洗哪?洗完好上点葯、真!」(駱駝・63)

訳、「……!さ。なにをぐずぐずしているの。はやく洗って薬をつけなくちゃ。さ、はやく!」(101～111)

この文では、中国語は「完」が用いられているのに対して、日本語は「シオワル」が用いられていない。「洗完」の訳は「洗って」になっているが、中国語の文をよく読んでみると、文中に同じ動詞が二回用いられていることに気がつく。つまり「洗完」の前に「洗洗(「洗」の重複した形のもので、ここでは軽い命令を表す)」という動詞が出ているのである。ここの「洗完」の「完」は「終わりまで～する」、「全部～する)、または「～しているのを終わる」というような意味を表しているものではないことは明らかだが、この二回出てくる動詞の担う役割については、つぎのように考えられるのではないかと思う。

a 一回目の動詞

洗洗、動作だけを表す。

b 二回目の動詞

洗、「完」と連接して動作の完了を表す。

ここで一回目の動詞、「洗洗」は動作だけを表すと解釈したのは、その表される意味の中に動作の完了を含んでいないからである。そのテストとして、もしつぎに出てくる「洗完好(ここの「好」は助動詞[注12]で、つぎにくる動作がその前にくる動作の目的であることを表す)」を取ってしまえば、その「洗洗」と後に出てくる動詞、「上(葯)」との関係がどうなるかを検証する方法が考えられるが、それらを括弧の中に入れてみよう。

「……!還不快洗洗哪?(洗完好)上点葯、真!」

このように、「洗完好」を取ってしまうと、「洗洗」という動作が行なわれた後、つぎの「上(葯)」という動作が行なわれる、という意味ははっきりしない。もしそれを表そうとすれば、このままでは不適切である。このテストから、一回目の動詞は動作だけを表す、ということができよう。

つぎに、二回目の動詞に「完」がついた時の意味について考えてみたいが、まずこの文の文脈を見てみよう。「洗洗」の前に「快(はやく)」という副詞があるが、このことから、この場合の「洗洗」は時間的余裕を持たない動作であることが分かる。その急いでほしい理由は、つぎにくる「上(葯)」という動作が短かい時間内に行なわれなければならないからである。このような要素を考慮に入れた場合、もしこの文を日本語に直訳する(同じ動詞を二回使って)と、「ジオワル」の表現が適切かどうかを見てみよう。

a 「……!さ、なにをぐずぐずしているの。はやく洗いなさい。洗って薬をつけなくちゃ。さ、はやく!」

a' 「……!さ、なにをぐずぐずしているの。はやく洗いなさい。洗いオワッタラ薬をつけなくちゃ。さ、はやく!」

この二つの訳では、a'よりもaの方が適当であろう。「洗って」のかわりに「洗いオワッタラ」を使うと、「洗う」という動作の終了を強調することになるため、この文脈においては不適切であろう。この日本語訳からも「洗完」の中の「完」は動作の終了を表すものではないことが分かる。その前にくる動詞「洗洗」が動作しか表さないため、つぎにくる「洗洗」でその動作が完了することを表す、という説明が考えられよう。

(3) 事柄がすむ、または終わることを表す。

「完」にはまたつぎのような用法もある。

⑬ 開完了会、我就去食堂吃飯。/会議がすんだら、食堂へご飯を食べに行く。(『實用現代漢語語法』336ページ 斜線の後の訳は筆者による。以下同じ。)

⑭ 開完了會、董桂花同幾個婦女回家去、(太陽・84)

訳、会議が終わると、董桂花は何人かの女と家路についた。(73)

この二つの文の中の「開完了会」は、「開会」という連語の間に「完了(ここの「了」は完了を表す語である)」がはさまれた形になっているが、中国語の「開会」は「会議を開く」という意味のほかに、「会議に出る」その事柄を表すことがある。つまりこの場合の動詞「開」は「開く」という動作を表すのではなく、「開会」で「会議に出席する」ことを表しているのである。中国語では「他正在開会」のような表現がよく使われるが、この場合の「正在開会(会議中という意)」は、「開」という動作が進行中であることを表すのではなく、動作主が会議に出席していることを表しているのである。用例⑬⑭の中の「開完了会」の「開完」も、「開」という動作と「完」とがつながりを持っているわけではなく、「開会」という事柄がすむ、または終わることを表すのに「完」が用いられているのである、と考えられよう。

中国語の「完」はこの意味で用いられる場合が少なくない。例えば、日本語の「食事をする」、「買物をする」というような表現に対して、中国語は普通の会話において、「吃飯」、「買東西」という連語を用いるが、「吃完飯」、「買完東西」で、食事がすむ、買物がすむ、という意味を表すことが多い。例えば、

⑮ 飯が済むと下女は臺所へ下る。(三四・49)

訳、吃完飯、女仆到厨房去了、(51)

⑯ 太郎は買物がすむと、家へ帰った。/太郎買完東西就回家了。

以上まとめた「完」の三つの意味と用法を表にすると、つぎのようになる。

〈表3〉「完」の意味と用法

意味と用法		語例	日本語に相当する意味	「シオワル」との対照
動作・作用の終了を表す	動きの量がなくなることによる終了	写完(論文) (論文を)書きオワル	終わりまで～する 全部～する	「シオワル」と対応する
	動作主の意志による終了	笑完 笑いオワル	～しているのを終わる	
動作・作用の完了を表す		洗完(手吃飯) (手を)洗って(食事する)	〈文中にくる場合〉 ～して ～したら ～すると	「シオワル」と対応しない
事柄がすむ、または終わることを表す		開完会 会議がすむ	～がすむ ～が終わる	

四、両者が対応しない原因について

「完」が「シオワル」と対応しない意味や用法もあるのは、中国語の動詞が一定の文脈において動作しか表さない性質を持っていることや日中両語の文法体系の相違などによるのではないかと思う。

四―一、中国語の動詞の表す意味範囲との関係

日本語の「シオワル」が動作・作用の終了を表すのに対して、中国語の「完」は動作・作用の完了を表す場合などにも用いられることは、中国語の動詞が一定の文脈において動作しか表さないことがある、という点と関係がある。「完」が用いられる文の中に同じ動詞が二回用いられているものが少なくないが、同じ動詞を繰り返して用いるのは、一回目の動詞で表されるのが動作だけで、その中に動作の完了を含まないからである。「シオワル」の訳になっていない「完」の用例をいくつか見てみよう。

⑰「童児」急忙遞過黄棉紙、大仙在香苗上抓了几抓、而后沾着吐沫在紙上画。画完符、她又結結巴巴的説了几句、(駱駝・179)

訳、「侍童」がいそいで黄色い薄紙をさしだすと、仙人は香の上に手をかざし、その手に唾をつけてなにやら書いた。お札を書くと、彼女はまたどもりながらしばらく話した。(312)

⑱「放開!我自己会走!」成崗猛喝了一声、転過頭、対着許云峰朗説道、「老許、我先走一歩。」説完便拖着沉重的鉄鏡、昂然走過徐鵬飛面前、径直朝門外走去。(紅岩・174)

訳、「離せ!自分で歩ける!」一喝した成崗は許雲峰を振返って、「許さん、お先にまいります」と明るくいうと、昂然と頭をあげ、出口へ向かって徐鵬飛のまえを通りすぎた。(133)

⑲作得了飯、她独自在厨房里吃、吃完、她喊了声祥子、(駱駝・192)

訳、支度ができると、台所でひとりでさっさとすませ、祥子に声をかけた。(334)

⑳「你馬上看、看完就還我、明天我要還他。」(野火・34)
訳、「大急ぎで読んで返してね。明日彼に返さなければならないんだから」(30)

以上挙げた四つの用例の中にいずれも同じ動詞が二回用いられている。⑰は「画」、「画完」、⑱は「説道」[注13]、「説完」、⑲は「吃」、「吃完」、⑳は「看」、「看完」、というふうになっているが、これらの文においてはどれも二回目の動詞に「完」がついた表現を省略することはできない。もしそれらを取ってしまうと、文の前後関係がそれぞれつぎのようになるが、どれも不適切である。

？……沾着吐沫在紙上画。(画完符、)她又結結巴巴的説了几句
？……、対着許云峰朗声説道、「……。」(説完) 便拖着沉重的鉄鏡、……。
？……、她独自在厨房里吃、(吃完、) 她嘅了声祥子、
？「你馬上看、(看完) 就還我、……。」

「完」の表現がなければ、「画」、「説道」、「吃」、「看」のつぎにくる動作はそれぞれ前の動作が完了した後に行なわれる、ということはっきりしない。前の動詞は動作しか表していないのである。

中国語のこのような文には特徴が見られる。ここに挙げた四つの用例を見ても分かるだろうと思うが、まず、これらの文では一回目の動詞を用いている表現は動作主がある動作を行なう場面を具体的に描写するものが多いということである。例えば用例⑰⑱⑲をもう一度見てみよう。

△ 沾着吐沫在紙上画(その手に唾をつけてなにやら書いた)
△ 転過頭、対着許云峰朗声説道(許雲峰を振返って、「……」と明るくいうと)
△ 她独自在厨房里吃(台所でひとりでさっさとすませ)

それから、この類の文には命令文も多いということも挙げられる。例えば用例⑳がそうである。

△「你馬上看……」(「大急ぎで読んで……」)

また前に出た用例⑫も同じである。

△「……!還不快洗洗哪?……」(「……!なにをぐずぐずしているの。はやく洗って……」)

以上述べてきた二種類の文の中に同じ動詞を二回用いて「完」の表現を用いているものは多いように思われる。が、それらに対する日本語訳は「シオワル」になっていないものが少なくない。

四―二、日中両語の文法体系の相違

日中両語の文法体系の違いも「完」が「シオワル」と対応しないことと関係する。ある動作をしてから、つぎの動作に移ることを表す場合、日本語では、動詞に接続助詞「テ」、「テカラ」、「ト」、「タラ」などをつけた形で、最初の動作を表すことができるが、そのような表現形式は中国語にはない。動作が継起的に行なわれることを表す表現形式としても、「完」が用いられているのである。例えば、つぎのような用例を見てみよう。

㉑ 祥子准知道自己不在吃完就滾之列、可是他愿意和大家一快児吃。一来是早吃完好去干事、二来是顕着和气。(駱駝・122)
訳、祥子は、自分が別格のことを心得ていたが、みんなといっしょに食べたいと思った。はやく飯をすませて仕事にかかりたかったし、仲間づきあいもあるからと思っていたのである。(216)

㉒ 祥子一辺吃、一辺把被兵拉去的事説了一遍。「哼、你這個傻小子！」劉四爺聴完、摇了摇頭。（駱駝・36）

訳、祥子はご馳走になりながら、兵隊につれさられた顚末を話した。「ちえっ、どじなやつだ！」すっかり聞いてから、親方は首を振った。（62）

㉓「祥子！就那辦麼啦！二十七見！」她朝着祥子的寛直的脊背説。説完、她瞭了白塔一眼、吸了口気、向西走去。（駱駝・81）

訳、「祥子、いいね、二十七日だよ！」彼女は祥子のびんとのびた背中へそう呼びかけると、白塔をちらりと見、溜息をひとつついて西のほうへ歩きだした。（141）

㉔ 況且、吃完就得走、還不許拉出車去、大年底下的。（駱駝・122）

訳、しかも、この年の瀬に、食ったらでてゆけ、車を引くことはいっさいまかりならぬとはなんだ、と。（216）

この四つの文に出てくる「完」に対して、日本語訳はそれぞれ「シテ」、「シテカラ」、「スルト」、「シタラ」の表現形式になっているが、「完」はこのような文脈にも用いられている。つまり中国語の「完」は、以上挙げたような、日本語の接続助詞の役割まで果しているのである。日本語では、動詞の後に特定の接続助詞をつければよい文でも、中国語になると、「完」などの表現を必要とすることが少なくない。例えば、つぎのような日本語の文に対しても、中国語では「完」が用いられるのである。

日　太郎は図書館で、宿題をやって、レポートを書いて、資料を調べてから、家へ帰った。

中　太郎在図書館做完作業、写完報告、查完資料、然后才回家。

五、おわりに

本稿では、アスペクトに関する日中両語の対照研究の一試みとして「シオワル」と「完」を扱ってみた。これで、従来動詞の表す動作の展開の様相の一つとして終結を表す表現形式だといわれている日本語の「シオワル」と中国語の「完」の性質がいくらか明らかになったのではないかと思う。筆者の力不足でまだ十分説明できなかったところも多いかと存じるが、中国の日本語学習者、または日本の中国語学習者の参考ともなれば幸いである。

〔付記〕

本稿は筆者の修士論文の一部をもとにしてまとめたものだが、宮地裕先生、森山卓郎助手など多くの方々の懇切な御指導を仰ぐことができ、ここに記して厚く御礼を申し上げたい。

〔注〕

① 「シオエル」も同じ形式のもので、一緒に扱うことにするが、「シオワル」と「シオエル」の使い分けについては、まだ分からないところがあるので、本稿ではそれを問題にしない。

② 『日本語教育事典』（一九八二、日本語教育学会編、大修館書店）に見

られる用語である。三七二ページ（姫野昌子担当）。

③ 前掲『日本語教育事典』、一八九ページ（吉川武時担当）。

④ 木村英樹「中国語」（一九八二『講座日本語学11』、明治書院）三五ページ。

⑤ 平凡社、七八～八六ページ。

⑥ 同注②。

⑦『待兼山論叢』第十七号、十二～十五ページ。

⑧ 例えば、香坂順一著『現代中国語文法』（一九六二、）、一〇一ページ。伊地智善継編『簡明基礎中国語』（一九七九、東方書店）、一一一ページ。劉月華・潘文娯・故韓著『實用現代漢語語法』（一九八三、外語教学与研究出版社）、三三一ページ。

⑨ 同注④。

⑩ 同注④二五ページ。活字の関係で一部の中国語の簡体字は日本漢字体に直した。以下同じ。

⑪ 動詞の後につく「完」には「なくなる、消滅する」の意を表すものもあるが、その場合の「完」は結果補語と考え、考察の対象から除外する。

⑫『現代漢語八百詞』（呂叔湘主編、一九八一、商務印書館）の説明による。二二七ページ。

⑬ ここの「説道」は、「説」と同じ意味を表し、話す内容を直接引用する場合に用いられる。

⑭ 例えば「了」などが挙げられる。

〔用例出典〕

(1) 井伏鱒二『黒い雨』新潮文庫、一九八〇
柯毅文・顔景鎬訳『黒雨』湖南人民出版社、一九八二

(2) 井上靖『夜の声』新潮文庫、一九八一　文潔若訳『夜声』上海訳文出版社一九八〇

※(3) 有吉佐和子『海暗』文庫本

(4) 黒岩重吾『背徳のメス』新潮文庫、一九八二

(5) 羅広斌・楊益言『紅岩』中国青年出版社、一九七七
立間祥介訳『紅岩』、『現代中国文学10　羅広斌・楊益言』河出書房新社、一九七〇

(6) 老舎『駱駝祥子』人民文学出版社、一九七九
立間祥介訳『駱駝祥子』岩波文庫、一九八三

(7) 丁玲『太陽照在桑乾河上』人民文学出版社、一九五五
高畠穣訳『太陽は桑乾河を照らす』、『現代中国文学5・丁玲・沈従文』河出書房新社、一九七〇

(8) 夏目漱石『三四郎』新潮文庫、一九六二
呉樹文訳『三四郎』上海訳文出版社、一九八三

(9) 李英儒『野火春風斗古城』人民文学出版社、一九七七
立間祥介訳『野火と春風は古城に闘う』、『中国現代文学選集12』平凡社、一九六二

上記の中で、※のついた作品は『日本語・中国語対応表現用例集I』（一九七七、日本語と中国語対照研究会編）による。また出自を記していない文は筆者の作例である。

〔参考文献〕

1、国広哲弥編『ことばの意味3』、一九八二年、平凡社選書
2、日本語教育学会編『日本語教育事典』、一九八二年、大修館書店
3、森山卓郎「動詞のアスペクチュアルな素性について」、『待兼山論叢』第十七号、一九八三年、大阪大学文学会
4、吉川武時「現代日本語動詞のアスペクトの研究」、一九七三年（金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』、一九七六年、むぎ書房刊）
5、久野暲『日本文法研究』、一九七三年、大修館書店
6、木村英樹「中国語」、『講座日本語学11』、一九八二年、明治書院
7、大河内康憲「中国語の受身」、『講座日本語学10』、一九八二年、明治書院
8、荒川清秀「中国語動詞に見られるいくつかのカテゴリー」、『愛知大学文学論叢』第六十七輯、一九八二年、愛知大学文学会